

## 地域情報（県別）

### 【滋賀】「死について考え、話し合う場を」今後10年の構想に住まいや保育所の開設も-徳田嘉仁・一般社団法人くわくわ企画代表に聞く◆Vol.3

2023年6月9日（金）配信 m3.com地域版

父が営む「徳田医院」（彦根市）のリニューアルに向け、多業種と構想を練る徳田嘉仁医師。地域の居場所をつくりたいとカフェや公園の開設、イベントの開催を検討しているが、これは「入り口のデザイン」。合わせて取り組みたいことに「出口のデザイン」を挙げるが、どんなものだろう。救急医時代、患者家族の反応を見るにつけ感じるようになった問題意識から、「地域の人が死について考え、話し合う環境をつくりたい」という。（2023年5月2日インタビュー、計3回連載の3回目）

▼第1回はこちら

▼第2回はこちら



徳田嘉仁氏（本人提供）

——徳田先生は2020年10月から診療所リニューアルの検討を始め、構想を具体化してきました。ターニングポイントは。

建築設計事務所「STUDIO MONAKA」の代表を務める岡山泰士さんとの出会いは大きかったと思います。岡山さんとは、社会福祉士・宅地建物取引士の久保有美さん（現くわくわ企画理事）の紹介で知り合いました。

岡山さんの専門は建築ですが、地域に向けて実にさまざまなことを行っているんですね。事務所を交流スペースとして開放してワークショップやアートイベントを行ったり、滋賀県大津市で「シガーシガ」という団体を立ち上げ、耕作放棄地を開墾して共同農園事業を行ったりマルシェを開いたり。2022年には京都市の事業に参画し、事務所を市内の船岡山公園に移して利用しやすい公園づくりに取り組んでいます。

くわくわ企画の活動にも建築・コミュニティデザイン担当として参加しています。岡山さんのほかにも音楽家や編集者など多様な人たちが協力してくれるので、構想の具体化が進んでいます。

——診療所のリニューアルに向け、（1）団体を立ち上げてのちに法人化、（2）**サイト**を開設して構想やこれまでの取り組みを紹介——。それぞれ珍しいと思いました。

一般社団法人を設立したのは2022年6月です。医療法人はできる事業が医療や保健衛生の分野に限られるので、これだけでは社会性を重視する私たちの方向になじみません。一般社団法人を設けることで各種イベントや飲食業を行いやすくなるわけです。一般社団法人くわくわ企画が造る新しい建物に医療法人徳田医院がテナント入居する形になれば、医療事業と社会事業の双方を行えます。

もう一つですが、サイトやSNSでの情報発信はコミュニティデザインの肝だと考えています。たとえハード的に診療所がリニューアルしても、その中のソフトが充実し、関わる人たちの熱量が高まっていないと十分に力を発揮できないでしょう。箱ができる前から私たちの思いや考え、動きを丁寧に紹介していくことで、メンバーの気持ちと地域の人の関心が高まりやすいのでは。私はカフェの運営やマルシェなどのイベントを手伝っており、そこで出会った人にサイトを紹介すると興味を持ってもらえることがあります。

情報発信は求人の中でも有効だと思います。今の時代、条件面を書くだけでは人が集まりにくくなっています。明確にビジョンを示すなど、情報に触れた人がその場に関わることのモチベーションを想像しやすい形で発信したい。実際、サイトなどで私たちの活動を知った医師や看護師から入職に関する問い合わせや希望も寄せられています。



地域のイベントを手伝う徳田氏（本人提供）

——公園やカフェ、ヤギ小屋の開設、イベントの開催は「入り口のデザインをつくること」とし、「将来的には出口のデザインも」と言います。イメージは。

これは、先述した研修医時代の経験（詳細はVol.2を参照）が関わります。救急医療の現場では、毎日のように高齢の人が搬送されてきました。患者さんが危篤状態に陥り、ご家族に治療方針の意向を尋ねることもありました。そんなとき、多くの人は「そんなこと考えたこともなかった……」と戸惑っていました。こんな反応の中には、搬送が初めてでないケースもありました。ご家族の心中は理解できる一方で、私はこうも考えました。「もしかしたら、『次にお父さんが運ばれたらどうしようか』と家族の死について考え、話し合う機会がなかったんじゃないか」と。

ひと昔前、多くの人は町医者に見取られるなどしながら、自宅で亡くなっていました。その後、高度経済成長のなかで病院がたくさん造られ、病院に勤める医師が多数を占めるようになりました。患者さんも病院の中で亡くなるようになりました。こうした時代の変化により、死ぬことを考え、話し合う機会が少なくなったのかもかもしれません。

——「出口のデザイン」として、死について考え、話し合う場をつくりたいと。

そういった場を日常生活の動線上に置きたいんですね。以前は3世代が同居し、祖父や祖母が死ぬさまを孫が見られる環境でしたが、核家族化で難しくなりました。社会の構造上、これは現実的な移行だと思うので、「再び多世代で」と戻そうとするのではなく、地域の中で似た形を再現できないかと。

2024年4月のリニューアル開院から10年くらいで住まいと保育所をつくりたいと言いましたが（詳細はVol.1を参照）、「住まい」というのは高齢者を中心に学生も住めるアパートのようなものをイメージしています。保育所の子どもがアパートに住んでいる高齢者と一緒にご飯を食べる機会があり、学生が高齢者のケアなどに携わり、子どもや学生が高齢者の亡くなっていく過程を見ていけるような。診療所を軸にしてコンパクトシティをつくるイメージです。

——興味深いです。特に、「出口のデザイン」のような構想を持つ医師はまだ少ないと思います。

今後10年で医療業界は大きく変わっていくと思います。iPhoneは私たちの生活を大きく変えましたが、誕生して15年ほどとそんなに経っていません。医療も機器とAIなどの進歩により、スマートフォンの普及のようにすごい勢いで変化していくのではないのでしょうか。

他方で、私たちが取り組んでいるコミュニティづくりは人と人とのつながりや交流を通して実現していく分野であり、まだ機器とAIはアプローチしづらい。これから訪れる時代を見据え、新しい価値を提供することを意識して活動していきたいです。

◆徳田 嘉仁（とくだ・よしひと）氏

2013年大阪医科大学（現大阪医科薬科大学）卒。沖縄県立南部医療センター・こども医療センターで初期研修を、滋賀家庭医療学センターで後期研修を修了。近江八幡市立総合医療センター、医療法人双樹会守上クリニックなどを経て、2024年4月に徳田医院の副院長に就任予定。日本プライマリ・ケア連合学会家庭医療専門医・指導医、日本専門医機構総合診療専門医・指導医。

【取材・文＝医療ライター庄部勇太】

記事検索

ニュース・医療維新を検索

